



第 20 回

ユーモア精神で 「自分の助け方」を研究

怖いイメージのある幻聴を「幻聴さん」と親しみをこめて呼ぶ北海道浦河町。この町の社会福祉法人「べてるの家」が開いている「べてるまつり in 浦河」(写真①)が 2012 年夏、第 20 回を迎えました。



写真① メンバーとスタッフで編成。セミプロ級の「ぱぴぷぺぽ楽団」。

浦河は「何もない春です」の歌で有名な北海道・襟裳岬の近く。交通不便この上ないのですが、海外も含め年間のべ 2500 人もが訪ねてきます。

「べてるの家」は 1983 年、精神科病棟を退院した数人とソーシャルワーカーの向谷地生良むかいや ちいくよしさんが始めた昆布の袋詰め作業から始まりました。今は 10 代から 70 代まで 100 人余りの住まいや仕事、仲間の婚活や子育て支援を手掛ける拠点になっています。

最大の魅力は、精神病とは一見、対極に見えるユーモア精神です。べてるまつりのメインイベント「幻覚&妄想大会」では、ユニークな体験をした人が表彰されます(写真②)。今年グランプリに輝いたのは、「焼き鳥は動物虐待である」という妄想的「愛の信念」に基づき、焼き鳥屋の赤ちゃん撲滅運動の先頭に立ち、ちゃんにパンチを食らわせた「天使のような」女性。賞品として「天使の羽一式」が贈られました。

ここでは、症状に合わせて、自分でオリジナルな「病名」を考えます。首相と恋仲になり、身体の一部が勝手に首相官邸に飛んでいく「統合失調症ドラマチック型」、考えていることを他人



写真② 天使の羽一式を贈られた、受賞の瞬間！
右側は歴代グランプリ受賞者、左端は向谷地生良さん。

に知られてしまうと恐れる「統合失調症サトラレ型」……。

こうした「生きづらさ」を持ち寄り、仲間と一緒に「自分の助け方」を見つけていこうという「当事者研究」が、2001 年に始まりました。「苦労を専門家や家族に丸投げせず、『苦労の主役』になる」という理念に基づいています。

べてるの家の当事者研究の本は海外に向けて翻訳され、当事者による活動は全国に広がりました。この年の 10 月には福島で、第9回当事者研究全国交流集会が開かれました。

東京・世田谷の作業所「ハーモニー」では、利用者が「幻聴妄想カルタ」を作り、大人気商品になりました。本人の苦しみをカルタにすることで、「訳のわからない人」を「こういうことに困っている人」という具体的なイメージに変えようとする試みです。この試みが評価され、ハーモニーには同年 11 月、「新しい医療のかたち賞」が贈られます。

「安心してサボれる職場づくり」「偏見差別大歓迎」「弱さを絆に」——。べてるのモットーには、ハッとさせられる響きがあります。日本生まれのこの挑戦、精神科を超えて、さまざまな分野に広がる予感がします。

編集部註：本連載は、小社から刊行している『誇り・味方・居場所——私の社会保障論』（2016 年 3 月 10 日発行）から選択して掲載しております。初出は毎日新聞朝刊に月 1 回掲載された「私の社会保障論」（2011 年 5 月～2013 年 9 月）です。したがって、記事中の人物・名称・活動・事物などで現在は亡くなっている方や変化している場合もありますのでご了解のほどお願い致します。

補注：今月の特集で著者の論稿「“ケア” という思想」を掲載しておりますので是非ご参照ください。

新しい医療のかたち賞

患者本位の医療をめざす「新しい医療のかたち」を指し示す活動を、医療の質・安全学会の委嘱をうけた委員会（9 人の医療ジャーナリストで構成）が選考。最終回となった第 6 回の 2012 年は、患者発の「ハーモニー」のほか、医療者発の東京・新宿の「くらしの保健室」と地域発の滋賀県東近江圏域の「三方よし研究会」が選ばれました。6 回の軌跡をまとめた冊子は以下からダウンロードできます。

<https://www.qsh.jp/partner/Documents/kinensi.pdf>



＊——＊★＊——＊ その後 ＊——＊★＊——＊

それから10年。

「当事者研究」という言葉は、様々な分野で「普通名詞」として使われるようになりました。

東京大学の哲学の教授、石原孝二さんは『当事者研究の研究』という本を出しました。先端科学技術研究センターには、「当事者研究ラボ」が誕生しました。精神科教授の笠井清登さんは、幻聴が聞こえる人たちと一緒に田植えに参加。収穫物は「東大教授もかかわった幻米」と名付けられて飛ぶように売れています。笠井さんとは、2013 年に浦河で日本統合失調症学会が開かれて以来の絆です。

患者と呼ばれていた人たちが、まちに出て暮らすようになったので、130 ベッドあった浦河赤十字病院の精神科病棟は空きベッドだらけに。

2014 年、病棟は閉鎖されることになりました。「まるでイタリアみたい」と当時、向谷地さんは語りました。イタリア同様、病院で働いていたスタッフは、まちの中につくられた診療所や支援の

拠点へ。スタッフの「地域移行」です。

2022 年秋には第 19 回当事者研究全国交流会が開かれます。

といっても、思いがけない伏兵。

コロナは、「べてる」にとって大打撃でした。名物の「幻覚&妄想大会」が開けなくなっていました。コンブや本をかついでの全国講演もできなくなっていました。収入激減。

ここでめげないのが「べてる」です。

当事者研究の理念にからめた「オンラインセミナー」を企画しました。たとえば、IT企業のサイボウズの青野慶久社長を迎えてのウェブシンポジウム。青野さんは、「100 人には 100 通りの働き方」がモットーです。それが若者の心を掴んで、3 人で始めた会社が15年間で 1,000 人を超えました。海外にも拠点を置く組織です。ウェブ会議で話せば話すほど、「べてる」とサイボウズの共通点が浮かび上がりました。セミナは、すでに 15 回を数えました。

浦河では、農家が、気候を生かして夏イチゴの栽培を始めていました。ところが、規格外で 2 割を廃棄しなければならず、悩

みを打ち明けられました。

そこで、ヘタとり⇒冷凍⇒イチゴジャムを開発しました。写真のように、いまは、コンブと並ぶ名物商品です。幼稚園からは「一緒に教育活動を」という相談が持ち込まれました。「オンライン見学会」も好評です。



いちごジャム



昆布

幻米づくりも、写真のように子どもたちも加わって続いています。



幻米づくり



地域の子供たちも一緒に参加

★news

<https://bethel-net.jp/>

★べてるの家の理念

<https://urakawa.bethel-net.jp/philosophy>

★べてるストア

https://bethel-net.jp/?page_id=2

★第30回べてる祭り

<https://bethel-net.jp/?event=%e7%ac%ac30%e5%9b%9e-%e3%81%b9%e3%81%a6%e3%82%8b%e3%81%be%e3%81%a4%e3%82%8a-in-%e6%b5%a6%e6%b2%b3>



＊単行本

lifesupport-o.com/order33/books.html

＊電子版

<http://www.shinanobook.com/genre/book/3443>

『誇り・味方・居場所-私の社会保障論』

大熊由紀子著

B6 判変型 定価 1,600 円＋税